

虹の架橋

今月の題字
小澤慶司さん

(大間々町4丁目)
第4区寿会や生涯学習協議会の会長で、みどり市社会福祉協議会の副会長さん。敬老の日は子供からお年寄りまで、多くの区民が集まり隣近所の絆を深めます。

星野富弘著『愛、深き淵より』
出版30周年記念企画展

みどり市東町の富弘美術館で、9月2日(金)から、『愛、深き淵より』出版30周年記念企画展の後期展が開かれ、入院中に描いた絵や詩など、富弘さんの原点ともいえる作品が並びます。今年富弘美術館が開館して20年、『愛、深き淵より』が出版されて30年、富弘さんが頸椎損傷のケガで首から下が動かなくなつたあと、口に筆をくわえて文字や絵を描き始めて40年になります。「あるがままを受け入れる」という富弘さんの生き方や、作品に込められたメッセージに励まされた人たちの輪が広がり、美術館には開館以来、600万人を超える人が訪れています。



先日、「朝日ぐんま」の1面に大きく富弘さんのことが紹介されていきました。その中で、「震災直後は被災地の方と共に悲しむことしか出来なかつた。でも『多くを失った人には多くが与えられます』という富弘さんの言葉に深く共感しました。」



小耳にはさんだ いい話 (文責・靖)
《193》

先日、桐生で腰塚勇人(こしげかはやと)さんの講演を聴き、とても感動しました。1965年生まれ、腰塚さんは大学卒業後、「天職」と思えた中学校の体育教師になり、バスケット部の顧問として熱血指導の日々を送っていました。そんな腰塚さんの人生を大きく変える事故が起きたのは2002年のことでした。スキーで転倒し、首の骨を折り、命は取り止めたものの、首から下が全く動かなく

5つの誓い

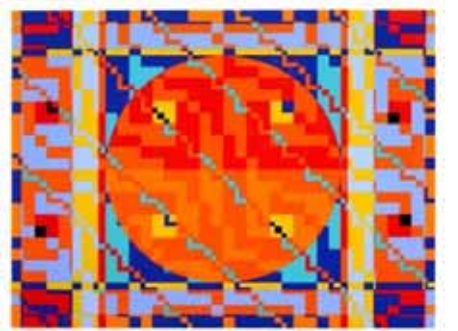
なつてしまいました。医師からは「一生、寝たきりか、車椅子」と宣告されました。絶望し、自殺未遂までした腰塚さんを救ったのは、「何があつても、ずっと一緒にいるから」という奥さんの言葉や、「代われるものなら代わってあげたい」というお母さんの言葉や、「先生、待っているから」という生徒たちの手紙でした。腰塚さんは、今の全てを受け入れて、いつも「笑顔」でいると決め、どんなことにも「ありがとう」を言おうと決めました。

のすそ野を北に向かつて大きく回りこむと、そこはもう、故郷の匂いのする渡良瀬川の流れる谷である。さしの長い家が、親せきのように肩をならべてよりそい、何億年もの歳月をかけてもつとも安らかな形に削りこまれた山が、その家々の屋根を静かに見守っていた。...



世界一小さな 定利屋 トイレ美術館

今月の絵《193》
オノサト・トシノブさん『円』



世界的な画家オノサト・トシノブさんは、終戦後、シベリアに抑留され、足利屋先代の松崎福司らと共に生死の境をさまよつた経験があります。オノサトさんは昭和25年から大間々中学校で美術教師をしたことがあり、「絵ぐらいは全部の子に良い点をやりたいね」と言っていたそうです。「86 onosato」と、74歳で亡くなった年の自筆のサイン入りの絵(シルクスクリン)が足利屋に残されています。この絵を見るたびに、「オノサト・トシノブ伝」を書くために何度か足利屋に足を運んでくれたトモコ夫人を思い出します。

事故から10日後、全く動かなくなつた手足が少しずつ動くようになりました。主治医から、「首の骨を折って、ここまで回復したのは腰塚さんがはじめてです」と言われるほどの奇跡的な回復でした。ケガから4ヵ月後、下半身と右半身麻痺の障害を残しながらも、腰塚さんは再び「先生」として学校へ復帰しました。そのとき腰塚さんは「5つの誓い」を決めました。
1「口」は...、人を励ます言葉や感謝の言葉を言うために使おう
2「耳」は...、人の言葉を最後まで聴いてあげるために使おう
3「目」は...、人のよいところを見るために使おう
4「手足」は...、人を助けるために使おう
5「心」は...、人の痛みがわかるために使おう



今年5月、腰塚さんが石巻で瓦礫撤去のボランティアをしている写真を、同行した私の親友からいただきました。「手足」は人を助けるために、「心」は人の痛みがわかるために使おう、を実践する姿に感動しました。腰塚さんのお父様は、旧東村花輪のご出身。地元でも腰塚さんの講演会を開きたいものです。

靖ちゃん日記

8月23日(火)
「三方良し」の会の役員会を開いた。「売り手良し、買い手良し、世間良し」という近江商人の精神は、二宮尊徳の「分度と推譲」の思想に通じるところがある。勤勉、儉約で得たものをみんまで享受しようというのが江戸時代からの精神でもある。最近では「バスツアー」での来訪者も増え、地図を片手に街の中を歩く姿が目立ってきた。国商店北隣りの路地の整備まで行い、観光客に楽しんでもらうから「三方良し」の心さ地道に精力的に伝えて行きたい。会議のあと、みんまで持ち寄った酒やビールやワインを飲んで盛り上がった。新字まが、秘蔵の蜂酒を出してまた、コハク色に変わった焼酎の下に黒く、たスズメバチがたたくまん入っていた。精力剤だという。一匹出してみた。スズメバチの目が怒っているようにみえた。尻から出した。「ウーン、マズイ。焼酎と一緒に一気に飲んだ。腹の中を蜂の針で刺され、吐気が出た。精力剤は、うま味はなかった。スズメバチのバチが当たった。」

撫子の路地を通らむ今朝の秋

毎朝の散歩コースのひとつに撫子小路(なでしここうじ)と自分で勝手に名づけた路地があります。半世紀前にタイムスリップしたような古井戸、錆びたトタン、朽ちかけた木柱の上には昔ながらの乳白色の球形の街灯。本町通りに出る角の家には手入れの行き届いた花が四季を通して咲いています。我家の愛犬プーちゃんもこの狭い路地が大好きです。なでしこの花言葉は貞節、勇敢です。なでしこジャパンの優勝以来、この路地を歩くことがいつそう好きになりました。



虹の架橋検索で、インターネットからでもご覧いただけます。

第194号は10月1日(土)発行予定です

